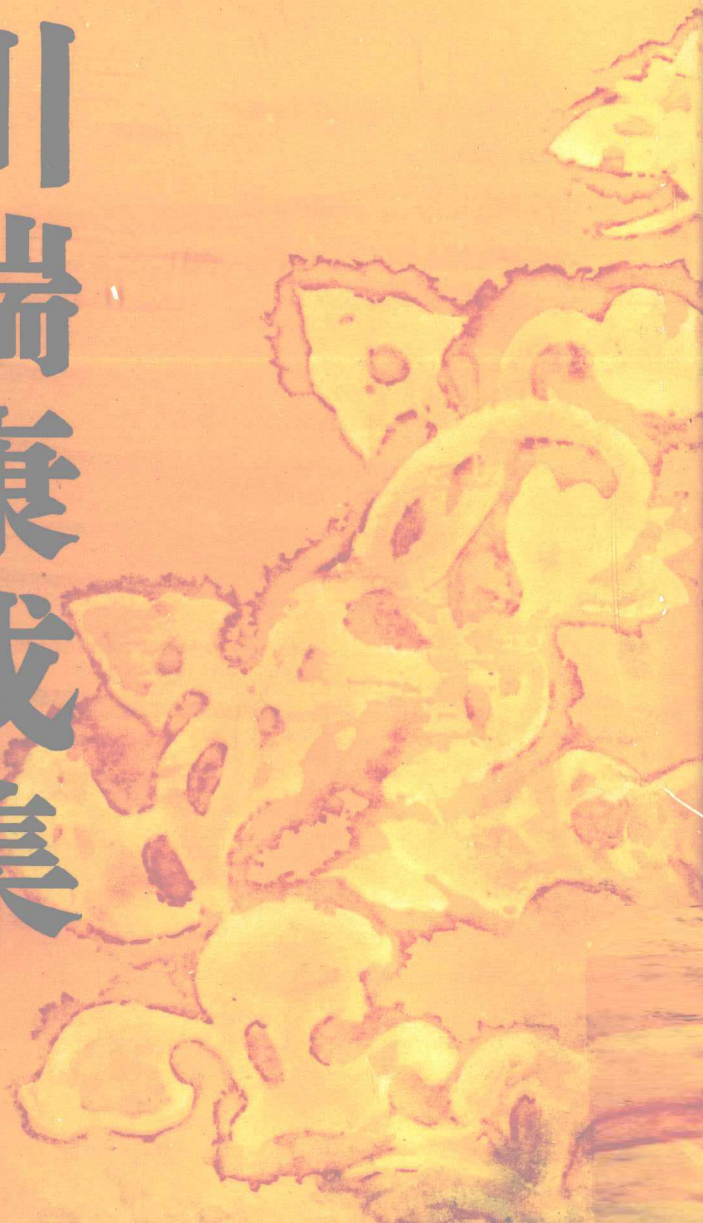
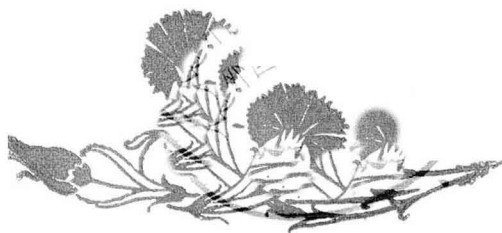


川端康成集



集成康端川

集全作名豪文代現



房書出河

川 端 康 成 集

現代文豪名作全集

第二十四回配本

昭和二十九年二月二十日 初版發行
昭和二十九年十月一日 再版發行

定價 二八〇圓
地方定價 二九〇圓

著 者

川 端 康 成

鶴 集 者

山 本 健 吉

發 行 者

東京都千代田區神田小川町三ノ八
河 出 孝 雄

印 刷 者

東京都品川區大井寺下町一四三〇
曾 根 盛 事

發行所

東京都千代田區
神田小川町三ノ八

株式會社

河 出 書 房

電話東京(29)三七二一五番

扶桑印刷 小泉製本

目次

目次

十六歳の日記	三
拾遺	一八
伊豆の踊子	三
春景色	九
抒情歌	四九
禽獸	六六
虹	八一
童謡	一一
雪國	二九
千羽鶴	三三
山の音	三七

末期の眼……………四〇〇

年譜……………四〇九
解説……………山本健吉

川
端
康
成
集

十六歳の日記

——作者言ふ。括弧の中は二十七歳の時書加へた説明です——。

五月四日

中學校から家へ歸つたのは五時半頃。門口の戸は訪問客を避けるためにしまつてゐる。祖父が唯一人寢てるのだから、人が來ては困る。(祖父は盲目でした。)

「唯今。」と言つてみたが、答へる者もなく靜まり返つてゐる。寂しさと悲しさとを感じる。祖父の枕元一間のところ

で、

「唯今。」

三尺に近づき、きつい調子で、

「今戻つて來た。」

耳へ五寸で、

「今戻つてきたんや。」

「おお、さうか。朝からししやつて貰はんので、うんうん言うて待つて、今また西向きに寢返りすんで、うんうん

言うてたんや。西向かしてんか。な。おい。」

「ぐつと、からだを提^さげて——。」

「ああ、そんでええ。蒲團着せといて。」

「まだ具合悪い。もう一ぺん、な。」

「そんな(七字不明)。」

「ああ、まだ具合悪い、やり直して、ええ。」

「ああ、繁^はなつた。ようしとくれた。お茶沸いてるか。後でまた、ししぎしてんか。」

「まあ、待ちいな。そないに一ぺんに出来るもんか。」

「はあ、分つたはるけど言うとかんとな。」

暫くして、

「ぼんぼん、惣正ぼんぼん、おおい。」死人の口から出さうな勢ひのない聲だ。

「ししやつてんか。ししやつてんか。ええ。」

病床でちつと動きもせず、かう唸^うつてゐるのだから、少々まごつく。

「どうするねや。」

「漫^{まん}瓶^{びん}持つて來て、ちんちんを入れてくれんのや。」

仕方がない、前を捲り、いやいやながら註文通りにしてやる。

「はいつたか。ええか。するで。大丈夫やな。」自分で自分の體の感じがしないのか。

「ああ、ああ、痛た、いたたつたあ、いたたつた、あ、ああ。」おしっこをする時に痛むのである。苦しい息も絶え

さうな聲と共に、しびんの底には谷川の清水の音。

「ああ、痛たたつた。」堪へられないやうな聲を聞きながら、私は涙ぐむ。

茶が沸いたので飲ませる。番茶。一々介抱して飲ませる。骨立つた顔、大方禿げた白髪しらがの頭。わなわなと顫ふるふ骨と皮との手。ごくごくとい飲みごとに動く、鶴首つるくびの咽佛のどぶつ。

茶三杯。

「ああ、おいし、おいし。」と舌鼓打つてゐられる。

「これで精氣を養ひます。お前、ええ茶買うて来てくれたけど、あんまり飲んだら毒や言ふんで、番茶を飲んでるね。」

暫くして、

「津の江（祖父の妹の村）へ葉書出してくれたか。」

「はあ、今朝出した。」

「ああ、さうか。」

ああ、祖父は「あるもの」を自覺せられたのではないか。蟲の知らせではないか。（減多に使ひもしない妹に、一度来てくれと云ふ葉書を私に出させたのは、祖父が自分の死を豫知したのではあるまいかと、私は恐れたのだ。）——私は自分の眼がぼうつとなるまで、祖父の蒼白い顔をみつめてゐた。

——本を讀んでみると、人の氣配がした。

「おみよか。」

「へえ。」

「どうやつた。」

急に大きい不安が胸に迫つて、私はテエブルから向き直つた。（その頃私は大きいテエブルを座敷に据ゑてゐたのです。またおみよといふのは、五十前後の百姓女です。毎日朝晩自分の家から通つて来て、煮焚きその他の用事をしてゐてくれました。）

「今日行つて、お年は七十五でかういふ理由で寢てられまして、もう三十日も、よく食へ物を上りますのみ、通しがおまへなので、一應伺うて下さいと言ひました。（お年がお年ですから、急なことはありますまいが、年病ですなあ。）と言うてやりました。」

二人の胸から大きい溜息が出る。おみよは續けて言ふ。

「（食事のよく行けて、通じのないのは、腹の中の毛物（獸）が食うてますのや。）と言うてやりました。（今までよりはずつと食が進ませう。これまでよりは咽がよく通りませう。）とは言うたはらしまへんけど、（その毛物は酒が好きです。）て。どうしたらよろしよまつしやろかと言ふと、（妙見様のお巻物を病人にいただかして、部屋中を有難い線香でくすべなはれ。）て。——毛物が憑いてる言うたか

て、時間を取り違へなはるくらゐで、別に變つたこともおまへんけどなあ。それでも、もとは鯉節こせつ一片でも咽にひつかかりましたのに、近頃は、おすもじ（すし）でもお結びでも一口にいけますし、ああ、あの一々ごくごくと言うて咽佛の動くのが氣に食ひまへん。稻荷さんが巫女に下らば

る、あの時も、出やはる時もごくぐくと咽佛が下りまつしやろ。それに、この前えらい酒飲みなはつたやろ。今日の占ひ、ほんまでつしやろか。」

「さあ。」

眞向から迷信と言ひ切つてしまふ勇氣もない。私は不思議な不安に襲はれて全く迷つてしまつた。

「それで家へ戻つて、五日市(村の名)へ見て貰ひにい(行)て來ました、と言ひましたら、(もう死ぬて言ははつたか。)と言ひなはるよつて、いいえ、急なことはないが、年病やと言つたはりました、禍ひやと言つたはりました、三十日も通じがないよつてに、一遍見てもらて來ましたと言うとききました。」

「それから、戻つて來てじきに(直ぐに)、線香を立ててくすべて、(昔から由緒正しいこの家には、そんな方(毛物のこと)があられない筈です。また、何でわけもないのに人に害なさる。茶や飯が欲しければ、欲しいと仰しやつたら差し上げます。早速出て行きなさい、出て行きなさい。)と言ひました。道理づくで出して見よとおもて(思つて)ゐた。明日から戌亥のすま(隅)に茶と飯と供へたらよろし。魔除けに、倉の刀を一本出しといとくなはれんか。拔身にして寢間の下へ入れときまよ。それから、明日もう一遍お稻荷さんに伺つてみましょ。」

「どうも不思議やな。ほんまやろか。」

「さあ。ほんまでつしやろか。」

——祖父の枕元で。

「お祖父さん、小野原(村の名)の狩野いふ人から手紙が來てるけど、金いつど借つたんか。」

「ああ、借つた。」

「いつ。」

「七八年前。」

「さうか。」

また飛び出しやがつた。(と言ふのは、あちこちに拵へて置いた、祖父の借金が、その頃一つづつ私に見つかつて來たのです。)

「そんなん、わたえ適ひまへんで。」と、おみよ。(おみよにも金銭上の相談をしてゐたのです。)

——夕飯、祖父は海苔卷のすしを食べてゐられる。ああ、あれ、毛物が食べてゐるのやろか。それ、咽佛が動いた。現に人間の口へ這入つてゐるのに、馬鹿馬鹿。しかしもう私の頭には、「毛物が食べてゐるのだ。」と言ふ言葉が刻みつけられて離れぬ。倉から一劍を取り出し、寢床の上で打ち振り、蒲團の下に入れたのは、自分ながら後で可笑しい。しかし、おみよは大眞面目で、部屋の空氣を切り拂ふ私の恰好を見ながら、「さう。さう。」と側から勢を附けた。若し人が見てゐたら、私は狂人になつたと、どんなに笑つたらう。

やがて暗くなつて、折々、

「おみよ、おみよ。」と呼ぶ細い聲が夜氣を顫はし、その度

に祖父の用を足しに行くおみよの足音が、本を讀んである私に聞えてゐた。そのうちに、おみよは歸つたらしい。私が祖父に茶を飲ます。

「うん、さうか、よし、よし、ぐうつと、うん、ぐうつと。」で、咽佛がごくごく動く。これ、毛物が飲んでゐるのか。馬鹿、馬鹿。そんな妙なことがあるものか。中學の三年生にもなつてゐて——。

「ああ、おいし。茶はよい。淡泊でよい。餘りおいし過ぎるものはいかん。ああ、おいし。——煙草は？」

ランプを顔すれすれに近寄せると、眼を少し開いて、「何んや。」と言はれた。おお、もう再び開かれないのかしらんと思つてゐた眼が、この眼が開いた。一道の光明が暗黒の世界に射したやうに嬉しかった。（祖父の盲目が治るだらうと思つたのではありません。その時祖父は臉を閉ぢてゐたのでせう。そのまま死ぬのではないかと、私は不安だつたのでせう。）

——これまで書き續ける間には、いろんなことを考へた。さつき劍を振り廻したことなどは可笑しくなつた。阿呆らしくなつた。しかし、「腹の中の毛物が飲食してゐるのだ。」といふ、この言葉は私の體ちゆうにくつついてゐた。——今はかれこれ九時。「毛物が悪いてゐる。」そんなことはないといふ意識がいよいよはつきりし、腦は洗はれたやうだ。

——十時頃、おみよ祖父のおしつこをさせるために来る。

「寢返りしたいなあ。——今どつち向いてるのや。うん、さうか、東か。」

「よつこらしよ。」と、おみよ。

「ううん。」

「もう一つ。」と、おみよ。

「ううん。」苦しい聲だ。

「こんで西向いたんか。」

「もうあんたもお休みやす。わたえも歸りまつさ。もう用事しまひでつしやる。」

間もなく、おみよは歸つて行つた。

五月五日

朝。雀が鳴き始めると、おみよが来る。

「さうでつか。二度？ 十二時と三時とに起きて、いしやつてあげなはつたんか。若いのに氣の毒でんな。お祖父さんに恩返しすると思うてな。——子が生れなんだら泊りまんねやけど、お菊は子を産むことを知つても、子を育てることは知りまへん。」（お菊といふのはお美代の息子の嫁です。その頃初産をしたのでした。）

お祖父さんに恩返しすると思うて——私はこの言葉ですつかり満足した。

學校へ出た。學校は私の樂園である。學校は私の樂園。

——この言葉はこの頃の私の家庭の状態を最も適切に現はしてゐはしまいか。

——夕方六時頃、おみよ来る。

「へえ、詣つて來ました。同じこつてした。不思議です。手物やとは言うてやはらしまへんけど、禍ひ（憑きもの）です。て。道理の分からん者やないよつてに、（そない騒がいで出ますやろ。）て。——それに、やつぱり年病です。て。（急なことはないけど、追々體が弱つて行きますやろ。）て。」

追々弱つて行きますやろ。——胸の中で熱度も繰り返しながら、

「さうか。」と溜息する。

「まだそれから、稻荷さんの言ははること、よう當りました。で。（この頃はちよつとまし、やろ、無茶飲み無茶食ひは止んだやろ。）て。——ぼんぼんにもさう見えまつか。今日は大人しいと。」

稻荷さんが病人の状態を言ひ當てたのを不思議に思ひ、禍ひ（憑きもの）とは本當であらうかと、また迷ひ始めた。家にある僅かの金で買った線香の煙枕頭に渦巻き、秋水煌々と床上に横たはつてゐる。

「夏になつたら難儀でんな。」と、おみよ。

「なんでや。」

「百姓は田が忙がしなつて、わたえも來てゐられまへんよつてにな。この有様では、もう一遍火鉢の傍へ出るやうに、ようなりなはらひんかいな。」

ああこの百枚の原稿を書き終る時、書き終るまでに、祖

父の身は、不幸な祖父の身はどうなつてゐるだらうか。（私は原稿紙を百枚用意して、こんな風な日記を百枚になるまで書き續けたいと思つてゐたのでした。日記が百枚になる前に祖父が死にはしないだらうかと不安でした。日記が百枚になれば祖父は助かる。——なんだかそんな氣持もするのです。そしてまた、祖父が死にさうに思へるからこそ、せめてその面影をこんな風な日記にでも寫して置きたいと思つてゐたのでした。）

——病人の言葉は一時程矛盾撞著^{ひつぽんどうちやく}しくなつた。しかし「憑き物が禍ひをしてゐる。」とは、迷信か、迷信でなくて本當か。

五月六日

「ぼん、もう學校へいきましたか。」と祖父がおみよに言ふ。

「いんえ。今は夕方の六時でつせ。」

「おお、さうかいな。ははははは——。」寂しい笑ひ聲だ。

夕飯は細い海苔卷二本、口に入れて貰つて丸呑みである。

「食べ過ぎんか。」と、今日は訊ねてゐられる。常にないことと、私は風呂で聞いてゐる。すると間もなく、

「まだ早いやろけど、えらい腹空いた。ぼんより先きに晩飯食べさしてんか。」

「今お上りやしたところおまへんかいな。」

「さうかいな。」

後は聞えずに、またあの笑ひ聲が聞える。私は湯の中で寂しい。

——夜、家の中は柱時計の音と空氣ランプの灯の音とだけだ。眞暗な奥の部屋から、

「しんど。しんど。ああ、しんど（苦しい）。と、千切れ千切れに、天に訴へるやうな聲が吐き出される。やがて、その聲が止んでまた静か。——また、

「ううん。ああ、しんど。」

短い苦しさうな聲は、私が寝るまで、絶えては續き、續いては絶えてゐた。それを聞きながら私は、

「急なことはないけど、迫々體が弱つて行きますやろ。」と心の中で幾度も繰り返してゐた。祖父の頭は少ししつかりして來た。常識を取り戻して來た。無茶食ひなども慣むやうになつた。

しかし、身體は日々に——。

五月七日

「よんべ（昨夜）は、しし、いべんと、ほかに二度程寝返りとか茶とかで起された。（もつと早く起きてくれてやないと、呼び疲れて息が切れます。）て叱られたけど、寢人つたんが十二時頃やさかい、なかなか目が覺めん。」

朝、おみやが來るのを待つて、私は訴へる。

「氣の毒でんな。わたえも頭痛が治つたら十二時頃までお内にゐたげまつき。晝でも二時間來んと、（泣いて暮して

ました。）て仰しやるよつてに、一時間毎に來たげてゐるんでつせ。」

昨夜は眠い私を起しては、病人がわけの分らない無理ばかり言ふので、憤り罵つたり、靜かに考へ直して不幸な人と悲しみ泣いてみたりしたのだつた。

——中學校に行かうとしてゐると、祖父は、

「いつ良うなりまつしやろ。」と、九まで絶望し一の希望に絶つた聲で問はれた。

「順氣（氣候）が定まつたら、良うなんなはるやろ。」

「えらい世話かけまん。すみまへん。」憐れみを乞ふ細い聲だ。

「大神宮様がこの家の上へ集まらばつた夢見ました。」

「大神宮様を信心したらよろし。」

「そのお聲が聞えました。有難いことやおまへんか、神や佛が捨てやはらひん。勿體ないことやおまへんか。」満足した聲だ。

——學校から歸ると、門口が開いてゐた。しかし家の中は靜かであつた。

「今戻つて來た。」と三度言ふ。

「おお、ぼんか。後でししきしてんか。」

「はあ。」

これくらゐ私に厭な仕事はない。私は食事をすませて、病人の蒲團を捲り、漫瓶で受ける。十分経つても出ぬ。どんなに腹の力がなくなつてゐるかが知れる。この待つ間

に、私は不平を言ふ。厭味を言ふ。自然に出るのだ。すると祖父は平あやまりに詫びられる。そして日々にやつれて行く、蒼白い死の影が宿る顔を見ると、私は自分が恥しくなる。やがて、「あ、痛たつた、いたたつた、ううん。」細く鋭い聲なので、聞いてゐる方でも肩が凝る。そのうちに、チンチンと清らかな音がする。

——夜。テエブルの抽出しを掻き廻してゐると、「構宅安危論」が出て來た。これは祖父が口述し自樂（隣村の男。祖父の易學や家相學の弟子。これは家相の本。）に筆記させたものである。出版しようと努力し、豐川（大阪の大金持）にも相談されたが、駄目だつたこの草稿、今は全く忘れられて私の机の奥に引つ籠つてゐる。ああ、祖父は一生の間何一つ志を遂げず、手を下したことは何もかも失敗ばかり、その心中はどうだらう。ああ、ようこそこの逆境で七十五まで生きてゐて下さつた。心臓の丈夫さ。（祖父が悲しみに堪へて長生きすることが出來たのは、心臓が丈夫だからだと、私は思つてゐたのです。）何人もの子や孫に先立たれ、話相手もなし、見ることも聞くこともない、（盲目で耳が遠いのです。）全くの孤獨だ。孤獨の悲哀——とは祖父のことだ。「泣いて暮してました。」と言はれる口癖も、祖父にあつては眞情なんだ。

（祖父の八卦や家相はよく當りましたので、ちよつと有名でした。遠くの國から見て貰ひに來る人もありました。ですから祖父は、「構宅安危論」を出版すれば、世の不幸な災

禍が救はれるものと考へてゐた事でせう。その頃私は祖父の易や家相を信じるでもなく信じないでもなく、あやふやな氣持だつたと記憶してゐます。それにしても、いかに田舎とは言へ、十六歳で中學の三年生にもなりながら、三十日も便祕してゐた祖父を醫者に見せようともせず、稻荷さんに占つて貰つたりして、「憑き物」ではあるまいかなぞと思つてゐたことを、今から考へると、笑ふにも笑へない氣持です。

また、祖父が豐川といふ金持と知り合ひになつたのは、お寺のことからでした。私の村に尼寺がありました。昔多分私の祖先が建立したものらしく、寺の建物や山林田畑は私の家の名義になり、尼さんは私の家に籍が入つてゐました。黄檗宗で虚空藏菩薩を本尊としてゐました。毎年十三詣りの日には、近郷近在から十三になつた子供が集まつては賑ひました。ところが私の村から一里ばかり北の名高い山寺に籠つてゐた聖僧が、この寺へ移つて來ることになりました。祖父は非常にありがたがつて、尼さんを追ひ出し、その寺に附いた財産の名義を手離しました。寺は立派に改築されて、名も變りました。その普請中、虚空藏その他の佛像を五六體、私の家の座敷に預つてゐました。そのお蔭で、疊を入れる金がなくて間に合せの簾簾を敷いてあつた座敷に青い疊が匂ひました。——この新しく來る聖僧を信心し、寺を改築し、また私の家の座敷に疊を入れてくれたのが、豐川といふ大金持だつたのです。

——祖父のやさしい心は時々現はれる。今朝も、おみよが、

「子産れ餅を三十軒拵へときましたが、思はん所からお祝ひをくれやはるので、足らんやうになりました。また拵へんなりまへん。」と言ふと、

「さうか、三十軒か。まだその上にか。この五十軒足らずの村で、お前とこみたいな家やのに、そない方々からお祝ひが来るか。」

後は何やら、泣聲に涙が交つて嬉し泣きしてゐられる。

（おみよのやうな貧乏な家でありながら、多くの家から祝ひが貰へたことを、祖父は喜んでやつたのです。）

——おみよは、祖父の世話をする私を氣の毒に思つてゐる。夜の八時頃、おみよが自分の家へ歸りがけに祖父に言ふ。

「しし出やいたしやへんか。」

「はあ。」

「そんなら後でもう一べん來まつさ。」

「わしがゐるから來いでもええ。」と、私は口から半分出したが出さずにしまつた。

五月八日

朝、おみよが来るのを待ちかまへて、祖父は昨夜の私の不親切をくどくどと告げて不足を言つてゐられた。私も少しは悪かつたかもしれない。しかし、夜中に何度も起され

ると腹が立つのだ。それに、おしつこをさせるのが嫌なのだ。おみよは私に言つた。

「不足ばかり言うて、自分のことばかり考へて、世話する人の身をお考へやすことはちつともないよつてに、かなはん。お互ひに因果とおもて（思つて）世話してますのやのにな。」

今朝はもう一切ほつて置いてやらうとまで思つた。毎日學校へ行く前に、用事はないか、と聞くのだが、今日は黙つて家を出てしまつた。けれども學校から歸ると矢張り氣の毒であるといふ心が起る。

——おみよが言ふ。

「今日、この間見て（占つて）もらひにいた（行つた）ことを話しました。そしたら（ように）來とくれた。その時分には、何でも二口に食べなんだのをぼんやり覺えてる。なんぼでも飲めたのを覺えてるやうや。」て。」

これを聞くとまた、腹の中の毛物が飲食してゐる、といふ言葉をおもひ出す。

——夕食の後、

「ほんまに親密な話をする。安心し。」

安心し、が可笑しい。

「こない困つてゐるのに、何を安心しますのやろ。」と、おみよは笑つた。

かと思ふと、

「もういい加減で御飯食べさしてんか。」

「今しがた食べたところやないかいな。」

「さうか。知らん。忘れた。」

私は悲しく呆れた。言葉は日々到低く、元氣なく、聞き取りにくくなる。同じことを十數度繰り返して言つてゐられる。

さて、私は机に向つて原稿用紙を擴げ、おみよは坐つて、所謂親密な話を聞かうと用意する。

（私は祖父の言葉をそのまま筆記しようと思つたのです。）「あの、ぼんの銀行の印形知つてか。さうか。わしの生きてるあひだはあの印形せんならん。（なんのこともだか分りません。）——ああ、やり損ひばかりで、先祖代々の財産をつぶしたけど、これでも一生氣張つて來ましたんやで。」

東京へいて（行つて）大隈さん（大隈重信侯）に會ふのやつたのに。家に坐つてゐるうちに、こない弱つてしもて。

——ああ、松尾の田地十七町あるのん、わしの生きてる間にすつかりぼんのもんにしてやりたい心で一ぱいやつて來たのに、仕方がない。（祖父は若い時から例へば茶の栽培とか寒天の製造とか言つた風のことをいろいろやつてみては悉く失敗し、また家相を氣にして家を建てたり壊したり造り直したりしてゐるうちに、次々と田や山を二足三文で賣つてしまつたのでした。そのなくした財産の一部が松尾といふ灘の造り酒屋の手に纏まつてゐたのです。せめてこれだけを取戻したいと、祖父は常々考へてゐたのでした。）もう十二三町もぼんの田地を持たしたら、しつかりしたもんや。

大學卒業したら、ばたばたせんでもええのに。島木（叔父の家）や池田（伯母の家）の世話になるのは、ぼんが氣の毒や。あの田地がぼんのもんになつたら、わしが死んでも御前さん（前に書いた新しい寺へ來た聖僧）に相談して、この家をぼん一人で守つていけるのに。鴻池（金持といふ言葉の代用語）のやうに錢さへあつたら、腰辨當がいりまへん。わしのこの思ひを通しにな、東京へいくつもりやつたのに残念なことにはいけまへん。いけんと言うて、このままには、すましてゐられまへん。早うぼんをしつかりした一家の主人にしてやつたら、一生涯人の世話にならんに、目が見えたらな、大隈へいつたら、何でもないので。

ああ。わしはどうしても、東京へいくよつてに、慈光さんと瑞圓さんと（新しい寺の聖僧とその弟子）西方寺（村の檀家寺）とに相談して來てんか、な。」

「そんなことしたら、東村氣違ひやと言はれる。」

（祖父が東京へ行つて大隈重信に會ひたがつてゐるのは、祖父自身としては目的があつたのです。祖父には漢法醫の藥術の心得が多少ありました。また私の父は東京の醫學校を出た醫者でした。そこで祖父は父の西洋醫術を幾分見覺えて、それを自分の漢法の藥術に加味し、久しい間田舎の人々に施藥をしてゐました。そして祖父はこの我流の藥術に強情な自信を持つてゐました。祖父がこの自信を一層強めたのは村に赤痢が流行した時でした。前に書いた尼寺が改築されるので、その佛像を私の家の座敷に預つてゐた年

の夏でした。五十軒ばかりの村で、一軒に一人平均と言つてもいい程の多くの赤痢患者が出て、臨時の避病院を二個所に新築した程の騒ぎでした。野までが消毒劑の臭ひでした。村の人達は尼寺の古い佛を動かした祟りだとも言ひました。ところが、私の祖父の薬で赤痢が割合手輕に治ることがありました。患者を隠蔽して置いて、こつそり祖父の薬を飲ませ、それで助かることがありました。避病院にある患者のうちにも、病院の薬を捨てて祖父の薬を飲む者もありました。病院から見放された病人が祖父の薬で助かったりしました。それが果して醫學的にどれだけの價値のあるものかは分りませんが、とにかく祖父の薬が不思議な利目を現はしたことは事實でした。ですから、祖父はこの薬を世に廣めたいと考へるやうになりました。そしてその後自樂（前出の人物）に願書を書かせて、三四種の薬を賣り出す許可を内務省から得ました。しかし、（東村山龍堂）といふ屋號のやうなものを印刷した包紙を五六千枚印刷したぐらゐのことで、その製薬の仕事は立ち消えになつてしまひました。これらの薬が死ぬまで祖父の頭にあつたのです。そして東京へ行つて、尊敬する人物大隈重信に會へば助力を受けることが出來ると、子供のやうな確信を持つてゐたらしいのです。薬の外にも、「構宅安危論」の出版のことなどを考へてゐたのでせう。）

「この家は北條泰時から出て七百年も續いたんやさかい、相變らず續きます。ばたばたばたと昔の盛大に戻る。」

「大きな話しなはるなあ。今にも出來さうな口振りや。」と、おみよは笑ふ。

「わしの生きてある間は島木や池田の世話にならんのに。ああ、家がこないにならうとは思はなんだのに。——思ふと、おみよ悲しい。聞いとくれや。わしがこんなに思ふ心根を考へてや。」

おみよは可笑しがつてさつきからしきりと笑ひころぶ。私は相變らず祖父の言葉を書し續ける。

「もう一息といふところやのに、わしのからだが弱つてしもた。金の二千や三千ならどうかしらんけど、十二三萬圓やなんてな。ああ、ならんことを頼むのや。わしがいかんでも、大隈さんがここへ來てくりやはつたら。可笑しいか。さう笑うとくれな。人を馬鹿にしとくれな。かなはんことをかなはすのや。な、おみよ、かなはんなら、七百年の家も駄目。」

「そやかて、ばんがおぬやすがな。そんな天の星を引つばるやうなこと言うて氣をもむのは、病ひの毒でつせ。」

「わしが馬鹿か。」聲は鋭かつた。「命さへあつたら、あゝ一生に一ぺんでもあの老人（大隈）に會ひたい。あとより（後へさがること）ばかりしてたら、あかひん。ああ、たとへ佛になつても小さい胸の一心を保ちたい。お前から見たら、わしや馬鹿や。一ぺんししきしてんか。これがかなはなんだら、いつ池へはまつて死んでも惜しいことはない。ああ。」